



赤い蠟燭（I）

山から里の方へ遊びにいった猿
が一本の赤い蠟燭ろうそくを拾いました。

赤い蠟燭は沢山あるものではありません。
それで猿は赤い蠟燭を花
火だと思い込んでしまいました。

猿は拾った赤い蠟燭を大事に山
へ持って帰りました。

山では大へんな騒さわぎになりました。
何しろ花火などというものは、鹿
にしても猪にしても兎にしても、

赤い蠟燭 (2)

亀にしても、^{いたち}鼯にしても、狸にしても、狐にしても、まだ一度も見たことがありません。その花火を猿が拾って来たというのであります。

「ほう、すばらしい」

「これは、すてきなものだ」

鹿や猪や兎や亀や鼯や狸や狐が押合いへしあいして赤い蠟燭を覗きました。すると猿が、



赤い蠟燭 (3)

「危あぶない危い。そんなに近よ
ってはいけない。爆発するから」
といいました。

しりごみ

みんなは驚いて後込しりごみしました。

そこで猿は花火というものが、
どんなに大きな音をして飛出すか、
そしてどんなに美しく空にひろが
るか、みんなに話して聞かせまし
た。そんなに美しいものなら見た
いものだとみんなは思いました。





赤い蠟燭 (4)

「それなら、今晚山の頂上^{てっぺん}に行つてあそこで打上げて見よう」と猿がいました。みんなは大へん喜びました。夜の空に星をふりまくようにはあっとひろがる花火を眼に浮べてみんなはうっとりしました。

さて夜になりました。みんなは胸をおどらせて山の頂上にやっで行きました。猿はもう赤い蠟燭を





赤い蠟燭 (5)

木の枝にくくりつけてみんなの来るのを待っていました。

いよいよこれから花火を打上げることになりました。しかし困ったことが出来ました。と申しますのは、誰も花火に火をつけようとしなかったからです。

つづく

